

ホシハジロ 英:Common Pochard 学: *Aythya ferina*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長: 430-483cm 尾長: 50-65cm
 翼長: 195-214cm ふ臑長: 36-41cm
 嘴峰長: 44-52cm 体重: 180-250g

測定値は榎本(1941)による。



写真. ホシハジロのオス(左)とメス(右)

羽色(繁殖羽):

オスは頭と首が赤茶色で、目の前方がわずかに黒い。目の虹彩は赤。くちばしは根元が黒く、中央部は青灰色、先端が黒。胸は黒く、背中と脇腹は灰色。上尾筒と下尾筒は黒く、尾羽は灰色。メスは頭、首、胸が茶色。喉、くちばしの付け根、目の周囲と目の後ろ部分は茶色が薄くて白っぽく見える。虹彩はこげ茶色。くちばしは根元から中央より少し先まで黒く、続いてオスより細い青灰色の帯があり、先端は黒い。背中と脇腹はオスと似た灰色と茶色がかかった色とが入り交じる。

2. 分布と生息環境

分布:

ユーラシア大陸に分布し、繁殖地は北緯30-60°で、西はスペイン・イギリスから東は中国東北部までだが、北海道東部でも繁殖記録がある。越冬地は日本を東端として、中国南部からインド中北部を経て中東。ヨーロッパ南部からアフリカ北部およびナイル川流域。

生息環境:

日本の越冬地では、沿岸域、平野部、山間部の湖沼などさまざまな環境に生息する。流れのある河川よりも止水が多い。数十羽から数千羽の群れを作る。全国で越冬するが、数が多い生息地は西日本に多く、特に伊勢湾、大阪湾から瀬戸内海にかけての沿岸域と、有明海に個体数が多い。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬期			渡り		繁殖期			渡り			

渡り:

日本では10月に入ると全国的に飛来が始まる。3月になると数が減少しはじめ、4月末までにはほとんど見られなくなる。緯度によって異なるが、繁殖地には3月上旬から5月上旬に到着する。

繁殖システム:

一夫一婦で、水深の浅い湖沼の周辺で4月から5月にかけて産卵する。一腹卵数は平均6個。抱卵期間は25日。メ

スは翌年も同じ繁殖地に戻る習性強いが年齢による差があり、一歳メスでは生存個体の88%、二歳以上のメスでは100%が前年の繁殖地に戻った(Blums *et al.* 2002)。

種内托卵:

ホシハジロには種内托卵の習性がある。卵のタンパク質分析によると、42個のホシハジロの巣のうち39個で種内托卵があり、37.5%の卵が別の親のものだった(Petrželková *et al.* 2013)。種内托卵はガンカモ類に広く見られる習性で、托卵するメスはこっそり他人の巣に卵を産むのではなく、巣の上に抱卵しているメスがいてもかかわらず、それを押しつけて産卵しようとすることも少なくない。そうした場合も激しい争いは起きないが、2羽が動き回るせいで巣から卵がこぼれ落ちるので、托卵されたメスはどちらの卵かに関わりなく、それを巣に戻す。ホシハジロの巣で行われた実験では、抱卵中のメスは自分の卵もニワトリの卵も区別せずに巣内に戻しており、自分の卵を識別することはできないようだ(Horák & Klvaňa 2009)。メスが托卵を受け入れるのは何らかの利益があるためだと考えられ、早い段階でのヒナ混ぜ(自分のヒナが捕食されにくくするために他の親のヒナを連れ去る)ではないかとの指摘もある(Eadie *et al.* 1988)。

4. 食性と採食行動

浅い水域で採食を行い、環境によって貝類、無脊椎動物、水生植物などを採食する。長野県で採集されたホシハジロの胃内容物では水生植物が主な食物になっており、特に栄養価の高い越冬芽が多く見ついている。動物質の食物ではユスリカなどの水生昆虫が見ついているが、貝類を食べていた個体はいなかった(羽田 1962)。一方、水生植物が少ない島根県の中海のホシハジロの胃内容物は、ほとんどが二枚貝だった。どちらの調査でも同じ場所に生息するキンクロハジロの胃からは貝類が見つかっており、長野県の調査地では食い分けによって近縁の両種が共存できていることが指摘されている(岡 1998)。また、中海のホシハジロは飛来当初は殻の軟らかいホトギスガイを主食にするが、大きなサイズの貝がなくなってくると主食を殻の固いシジミに切り替え、それもなくなると中海から離れてしまう。一方、キンクロハジロもホトギスガイやシジミを食べるが、巻き貝や甲殻類などもよく食べており、食物資源を長期間利用できるため、ホシハジロよりも長く中海に滞在する。両種が食べる二枚貝の大きさは1-23mmだったが、ホシハジロはキンクロハジロよりも嘴峰長が長いので、より大きなサイズの貝を捕食していた(Sekiya *et al.* 2000)。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 雌雄の性比が地域によって異なる

ホシハジロはオスとメスの数に地域的な差がある。バードリサーチが2014~2016年の1月に行った調査では、日本列島を北および東に進むほど(緯度と経度の数値に比例して)、ホシハジロの群れに占めるオスの割合が高くなっていった(図1)。ヨーロッパや北米でも、潜水ガモ類にはこうした

傾向が見られる。その理由については、攻撃的なオスがよい餌場からメスを追い出している、オスの方が寒さに強い、オスは繁殖地に近い場所で越冬する、オス・メスで好む食物が異なるなどの説があるが、よく分かっていない。オスに偏った群れではつがい形成に困りそうだが、秋から冬にかけて つがい形成を行う水面採食ガモに対して、潜水ガモ類は春が近くなってからつがい形成を行うため、越冬中の性比のアンバランスはつがい形成の障害にはならないようだ。ホシハジロのつがい形成時期についての情報はないが、近縁のオオホシハジロでは、ほとんどの個体が越冬地を離れて繁殖分布域のカナダに渡ってからペア形成をしている(Johnsgard 2010)。潜水ガモのつがい形成が遅いのは、潜水時お互いが離れてしまうため、オスのメイトガードや捕食者に対する警戒行動がメスのメリットにならないためだと考えられている。

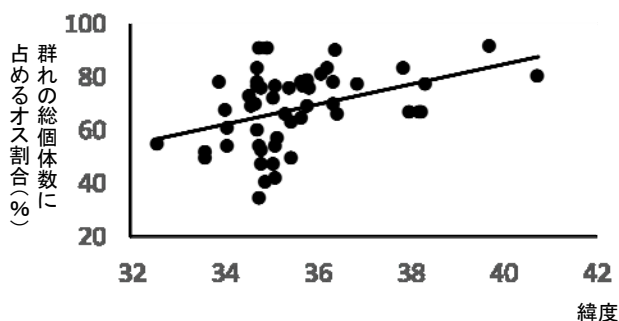


図1. 2015年1月のホシハジロのオス割合.

● 近縁種との交雑

ホシハジロは近縁のキンクロハジロやメジロガモと交雑するが、特に絶滅危惧種のアカハジロとの交雑は深刻な問題である。アカハジロの野生個体は200羽以下と推定されており、アカハジロの純粋な遺伝子を持つ個体が、ホシハジロやメジロガモとの交雑によっていなくなってしまう危険が指摘されている(Hearn 2016)。日本では毎年数羽のアカハジロが観察され、それらはホシハジロの群れの中にあることが多く、両種の特徴が混ざった個体が見つかっている。

● 個体数の減少傾向

ガンカモ類の生息調査では、1990年代半ばから全国の総個体数に減少が見られる(図2, 環境省 2016)。調査地数の変化を考慮した統計的な解析でも同じ傾向が示されており(Kasahara & Koyama 2010)、継続的なモニタリングが必要である。ヨーロッパの繁殖個体も1980年代以降減少が続いており、湖沼の水質悪化、養魚池の消失、捕食者である外来種ミンクの広がり、そしてユリカモメコロニーの減少が原因として指摘されている。ホシハジロはユリカモメのコロニーのそばで繁殖することが多く、ユリカモメの警戒行動のおかげでコロニー内では巣の捕食率が低くなる(Fox *et al.* 2016)。そのため、ユリカモメのコロニーの減少によってホシハジロの繁殖成績が下がり、個体数の減少につながったと考えられている。

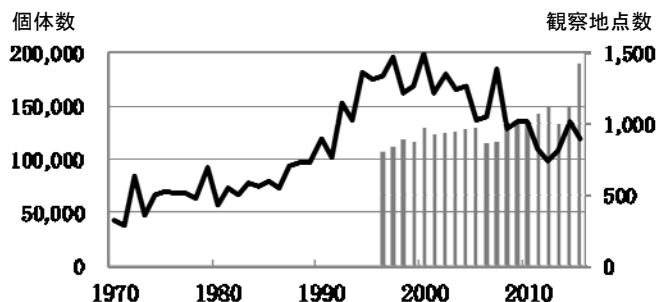


図2. 1月のホシハジロの個体数変化。折れ線が個体数、棒は観察地点数。グラフはガンカモ類の生息調査をもとに作成。

6. 引用・参考文献

Blums P, Nichols JD, Hines JE, Mednis A, Hines E (2012) Sources of variation in survival and breeding site fidelity in three species of European ducks. *Journal of Animal Ecology* 71: 438-450.

Fox AD, Caizergues A, Banik MV, Devos K, Dvorak M, Sjenic J (2016) Recent changes in the abundance of Common Pochard *Aythya ferina* breeding in Europe. *Wildfowl* 66: 22-40.

Hořák D, Klvaňa P (2009) Alien egg retrieval in common pochard: Do females discriminate between conspecific and heterospecific eggs? *Annales Zoologici Fennici* 46: 165-170.

Johnsgard PA (2010) Waterfowl of North America: POCHARDS (Fresh Water Diving Ducks) Tribe Aythyini. University of Nebraska-Lincoln. Lincoln.

Kasahara S, Koyama K (2010) Population Trends of Common Wintering Waterfowl in Japan: Participatory Monitoring Data from 1996 to 2009. *Ornithological Science* 9: 23-36.

Petrželková A, Klvaňa P, Albrecht T, Hořák D (2013) Conspecific Brood Parasitism and Host Clutch Size in Common Pochards *Aythya ferina*. *Acta Ornithologica*. 48: 103-108.

Richard H (2016) Action Plan for Baer's Pochard (*Aythya baeri*). 1st Meeting of the Sessional Committee of the CMS Scientific Council.

Rohwer F, Anderson M (1988) Female-biased philopatry, monogamy, and the timing of pair formation in migratory waterfowl. *Current Ornithology* 5: 187-221.

Sekiya Y, Hiratsuka J, Yamamuro M, Oka N, Abe M (2000) Diet selectivity and shift of wintering common pochards and tufted ducks in a eutrophic coastal lagoon. *Journal of Marine Systems* 26: 233-238.

榎本佳樹 (1941) 野鳥便覧. 日本野鳥の会大阪支部.

岡奈理子. (1998). 浅水域のprey-Predatorシステム. 月刊海洋 30: 289-295.

環境省自然環境局生物多様性センター (2010) 第46回ガンカモ類の生息調査報告書(平成26年度). 環境省.

羽田健三 (1962) 内水面に生活する雁鴨科鳥類の採食型と群集に関する研究_XIII雁鴨科鳥類の食物. *生理研究* 10: 181-211.

執筆者

神山和夫 バードリサーチ

大阪で育って東京に引っ越してきた私は、ホシハジロはオスが多い群ればかりという印象があったので、ホシハジロの性比がほぼ半々の群れを九州で見て大いに驚きました。3年続けたカモの性比調査では、ホシハジロとコガモは北に行くほどオスが多いことや、雌雄の数に地域差が見られるが年によってパターンの異なる種があることが分かりました。調査に参加して下さった皆さまに、お礼申し上げます。

